

今！ 引揚者が叫ぶ平和の鎖

静岡県 渡邊 行久

はじめに

平和祈念事業特別基金の慰籍事業の一端として、引揚者の労苦を伝える平和の礎もいよいよ最後ということ、ようやく私もペンを取らせて頂いた。「引揚者でなくては引揚者の労苦は分からない」とだれもがそう言っている。宜なるかなである。しかし自分たちのことばかりでなく、終戦によって日本政府の混沌とした行政の中で、四〇〇万人を超える海外からの引揚者の政治的、行政的手続きは大変なことだったと思う。現在の日本政府や社会はすべてが整っているが、焼け野原になってしまった当時の東京で政府の仕事を思うとき、それに携わった人の労苦も忘れてはならない。今日の車社会、ネットの情報、満ち足りている食糧生活を思うとき、あの配給券ですべてを求めなければならなかった戦後の統制時代。それを耐え抜いた

日本人の今日の経済大国の礎は、そのところに根ざしていたことと思う。再興を汗した、今は亡き先輩に心から感謝と敬意の念を禁じ得ない。

劇団四季の浅利慶太は次のように述べている。

「あの悲劇を語り継ぐ責任が我々にはあると思う。戦争で死んでいった圧倒的な数の兵たち、戦後無辜の罪に問われ死を迎えざるを得なかった軍人たち、一発の原子爆弾、一夜の無差別空襲で命を奪われた数え切れぬ市民たちは、皆我々の兄弟、父母の世代である。今日我々を包み込む『平和』は、あの人たちの悲しみの果てに齎された。齎された。哀悼と挽歌は、我々の手で奏でなければならぬ。」

私は、今日この綴りを走らせている自分を振り返り、限らない報恩の合掌と慰籍の心を送るものである。

顧みて

大正の不況に 堪え難き 幾人ぞ

明治の人も 大正も 昭和の人も

善隣の義に勇み 大陸へ

躍動に 建業の 礎石たらんと

我も 若き血潮 みなぎり

天津華北交通(満鉄)の人となり 六年

忘れ得ぬ 二〇・八・一五 砂塵の暑い日

玉音に 慟哭 国の未来を憂いたり

偲べば！

あの時の痛恨 あの時の感情

自失茫然 さまよう虚脱状態

志 半ば 百日児背いて 引揚げ

させたくない 子らに あの苦しみ

今故里の水に 六十年を生きる

思えば！

十億の人が 平和を叫べば 平和は来る

小野よう子は「トリノ五輪」で言った

戦争の悲惨 思えば

今日のくらし 今昔の感深し

そして 汗した仕事 我らのタベ

平和の盃に 感謝の祈り

何はなくともいい 真っすぐな心で

ただ朽ちるだけでなく 国のために

艶やかに 朽ちる その人でありたい

一 大正時代から昭和の初めの不況

だれしもつらいことより楽しいことの方が良いし、古い話より新しいことの方が新鮮味があつて良い。しかし、その新しい話は過去があつて現在があるのであつて、未来を語る事ができるものである。少なくとも、明治から一四〇年その歴史の頁には、今日を造り出したヒダがある。

昭和九(一九二〇)年ごろから約十年に亘つた世界恐慌時代は、それは今日の金融危機のようなものではなかつたかと聞く。働きたくても職は無い、食へるものは無し、私の家などは百姓家で貧しいときはキャベツにソースをかけて、それが夕食のおかずであつたことを子供心に覚えてゐる。それは日露戦争、第一次世界大戦で国費を使い果たし、国民に緊縮生活を強い国策で、それに耐えて當時の人は助け合つたのであつた。今晚の米が無くて借りて歩いた母の姿を思い起こすと、当時の人の心は苦しい中にも助け合うという互助愛人の精神が満ちていて、生きる力を持っていた。

二 大陸へ大陸へと国家的推奨

親兄弟に「俺は満州に行く」と言った。突然の発現に親族は驚き、「なんでそんな遠くへ、ほかに働く所があるだろうに」と口々に反対した。しかし、私の一旦決めた心は変わらなかった。

国では毎日毎日、新聞で、ラジオで、大陸への雄飛をと呼び掛けていた。食糧難、就職難、国費の削減といった財政難を解消する国策のためにも、若者、小百姓に公を以て満州渡航を勧めたのであった。

当時の物価指数とは言え、大学出が月二十五円〜三十円、大工七十銭、人夫（土方）三十銭、米一俵一十六貫（六十キログラム）一六円ということだった大陸に行けば、給料が増えて二〜三倍になるといふ触れ込みがうわさとうわさと呼んだ。要するに大陸移民であった。私の心に、当時そのような甘い流言も伝わり、大陸へ渡ることがそのときの理想となって、引くに引けない危機状態であった。二十二歳の若僧の心は燃えていた。

三 満州航空と華北（支那）交通の二通の就職の取得

(一) 満州航空でのこと

日露戦争の総参謀長であった陸軍大将児玉源太郎さんの長男児玉秀雄さんを紹介してくれる人があった。当時、秀雄さんは中華航空の総裁であったが、拝眉のうえ名刺を頂いた。東京銀座の朝鮮銀行地下室で入社試験を受け合格し、新京の満州航空に決まった。

そのとき、私は二十二歳の青年であった。親の反対を押し切りトランク二個を両手にして、一人で新京行きの手切符で特急つばめに乗り関釜連絡船、朝鮮鉄道と道中二泊を列車内で過ごし、新京に着いたのが夜の九時半ころだった。提灯を持った新京ホテルの番頭さんに頼み宿に案内されたが、ホテルとは名ばかりで、中国風の土造りの部屋で南京虫に悩まされ眠れなかった。

翌日の早朝、馬車に乗って約二十キロメートルぐらい走って日露戦争の古戦場南領の満州航空の事務所に着いた。児玉さんの名刺と就職証明を出して人事課長と会ったときは、希望が叶えて嬉しかった。

満州空港では約三週間ほど寮に入れられたが、仕事を全く与えてくれないのでいやになり、無断で社を飛び出し、中国馬車（マーチョ）を拾って新京駅（現長春）に着い

た。構内に静養軒という看板の出た食堂があり、そこでカレーライスを食べながら考えた。そして、満州航空の人事部長宛に手紙を書いた。推薦人が中華航空の児玉秀雄総裁であるので、児玉さんの顔を汚すことはできない。それと、食い逃げしたと思われては人間のこけんに関わるとも思い、桜模様の五十銭札三十枚(十五円)を手紙と共に封筒に入れて、郵便局のポストに入れた。乱暴であったし怖いもの知らずであった二十二歳、「支那に渡るので心配しないで下さい」と記した。当時は、既に新京では日本語が通じたので助かった。人間の一生とは紙一重の場がある。

私はあるとき満州航空を飛び出さなかったならば、昭和二十年八月九日ソ連が日ソ中立条約を不法に破り関東軍と戦い、民間日本人もソ連軍の餌食となったあの忌まわしい惨事に巻き込まれて、今日の生は無かっただろう。神が与えてくれた私の運命に感謝するばかりだが、その反対を考えたとき、ゾッとすることが今もある。

(二) 華北交通に入社する

せつかく満州航空に入社して新京までやって来たが、三週間ぐらいで簡単にそこを飛び出すような無謀な行動

をとった理由の一つには、私はもう一つの支那に渡りたい希望があった。以前から鉄道員になりたいと思っていた私は、親戚で華北交通唐山站(駅)に勤めていた鈴木利雄さんに、鉄道員になりたい旨を文通していた。中華航空の試験と同じころに、華北交通の採用試験を東京支社で受けて合格し、渡支証明を交付された。言うなれば、渡満と渡支の両許可証を得ていたのである。そして最初に満州航空に行ったのだった。合格証を洋服の両内ポケットに通ずつ入れて、どっちが良いか天秤に賭けながら満州に来たのだった。

全く交通の分からない地図を持って、新京から北京行きの列車に乗った。万里の長城の起点である山海関駅で支那への入国の手続きを済ませ、渡支証明と共に持金全部を支那の貨幣連銀券に変えた。だが、新京ではある程度日本語が通じたが、支那に入ると全く言葉が分からなかった。

漢字のやりとりの会話で、目的地唐山站(駅)で降りた。鈴木助役さんと会い、ここで勤めることができたことは、満空を無断で飛び出てきただけに、安どした。初めて知

る外国人との交き合いをしながら、庶務経理の仕事を助役さんの指導によって実施した。華北交通に入社して良かったと、やっと安どした。ハ絃寮という華北交通の寮に、五、六人が雑魚寝しているような部屋に入れられた。今までやったことのない自炊をする。軍隊と同じ飯盒で飯を炊き、毎日同じ豚汁、それが唯一の夕飯の菜(おかず)だった。日本での生活も前述のように苦しかったが、夢にまで見た支那での生活は、そんなに甘いものではなかった。

私はそこで一人前の人間として鍛えられ、成長し生きる力を養われたものだと思っている。その時代に得た生活力が今日の自分であることを思い、自戒するときがある。

四 唐山站勤務

(一) 日本語教育について

昔の支那と満州国との国境に山海関站(駅)がある。万里の長城の起点になっている所である。ひと駅の中に満州国と支那の駅が二つあった。北京から山海関までの路線を京山線とっていたが、唐山站はその中間ぐらいの所にあった。

イギリス人の開拓した優力な炭坑の町でもあり、イギ

リス人の住居は赤レンガで囲まれ、ものすごく広い市街地であった。鉄道関係のすべての施設を備えている大きな街で、人口は二十万人以上あったろう。見渡す限りの大平原で、地平線に太陽が沈む光景は美しく、さすがに大陸だと思った。

駅員は三百人近く働いており、そのうち日本人は七十人ぐらいだった。私はその中国人鉄道員の子弟の八、九歳から十四、五歳までの子供に日本語の教育をすることを命ぜられた。午前一時間半、そして午後一時間半の時間を割き一日三時間も教えていた。規律、礼儀そして敬愛の心を養うことも教えるように指示された。日本語教育は、最初は「これ何ですか?」「それは鉛筆です」で始まり、一年で普通の対話ができる四等試験に合格させた。私も同時に中国語を勉強して当時は役に立ったが、今は忘れてしまった。この日本語教育は、華北交通の中国人に対する宣撫工作とも言われたもので、日本と中国の融和を図る目的で、極めて重要な仕事であった。また、八路军の情報を知る上でも、鉄道愛護の上でも大事な仕事と捉えていた。

その唐山市は戦後の昭和三十三年（一九五八）年には人口百万の大都市となっていた。そこに大地震が発生、死者二十四万人、重傷者十六万人あったという。未曾有の被害者が出たことは耳に新しいことであるが、当時の中国の毛沢東主席は文化大革命のときで、外国人からの援助をすべて断つた。それは、外国に情報が流れることを排除する鎖国主義を取っていたので、不明なことはかりだった。最近になってようやく情報が解かれてきたが、私にとっては忘れられない所であり、それだけに心がかき乱れていた。私は入社時の資格は雇員だった。そのうちに準職員になった、職員になれば、軟車（グリーン車）にも乗れることになったが、終戦でその夢も果たせず引揚げの身となった。

(二) 華北交通社歌、華北交通青年隊の歌

この歌の精神が日本軍に活かされていけば日支事変は拡大せず、大東亜戦争にならなかつたと思う。驕りではなく、協調と融和の方針こそ平和を求める日本のこれからの道ではなからうか、タイトルを平和の礎から広く世界の人々に呼び叫ぶために、鎖とした私の考えの由縁もそこにある。

華北交通社歌、青年隊の歌詞を各一節のみ記す。

華北交通社歌

一、皇天の啓示かしこみ

善隣の義に勇むもの

おほいなり華北交通

民族の提携かたく

わきあがる興亜の希望

われらねがわくば

建業の礎石とならみ

(以下略)

華北交通青年隊歌

一、ゴビの砂漠に風あれて

黄塵空を蔽うとも

大地を踏んでゆるぎなく

隊伍堂々進むべし

我等鉄道青年の

見よ堅剛の意気と熱

(以下略)

(三)唐山市居留民団弁論大会での入賞

唐山站(駅)は町が大きいので大駅であった。毎日石炭一列車(四十輛)を日本の九州小倉市に送っており、それ以外に日本軍の軍用列車並びに軍需物資を積載した列車が必ず停車し、水の補給をしていた。唐山市には領事館もあり、日本軍の師団司令部があった。在留日本人は二千人を超えていたと思う。日本人小學校は中學校と同であった。終戦前、その中學校の講堂で居留民団による弁論大会があり、私はそれに応募し入賞した。そのときの演題は「建設の陰」という題であった。それは、北支那に駐屯する日本軍の物資輸送には、中国人労働者(当時苦力といった)の力を得なければ列車は動かず、ひいては作戦の遂行はできない。だから中国人労働者の存在は大きいという趣旨の内容であった。

領事館から表彰され、賞金は十円とペンシル一本をもらった。だが、後日この弁論内容が中国人を擁護するといふことから、憲兵隊で調べられた。私は本当のことを言っただけだったが、そのころになると言論も厳しく統制されていた。

当時、領事は横須賀出身の人で、小坂部蒞という人で、立派な人だった。それから領事館警察職員と仲良くなり、様々な話を聞くこともあった。唐山駅引揚げのときには、荷物を貨車に積み込む手伝いもしてくれた。中でも福島県相馬市の盛鉄郎さんは、六十三年経った今も忘れることのできない人である。今はどうしているかと思いが走る。

五 結婚のため一時帰国

昭和十九年十二月、父や母が心配してくれて東京麻布霞町の八條セイ子と結婚することになった。女學校を出て農林省に勤めていた二十歳の女性であった。華北交通本社に一月の休暇を申請、許されて久しぶりに帰国した。大東亜戦争の戦況は厳しくなっていて、下関駅からの特急は定時に走っていなかった。東京空襲必至の貼紙が、至る所にあった。結婚式は昭和十九年十二月二十日、モンペ姿の花嫁と国民服の私、それに親戚、近所の人たち十四、五人で湯河原の五所神社で式を挙げた。日本酒が無く、どぶろくでの祝宴だった。宴たけなわ時、B29襲来の空襲警報が発令されて、電気が消された。暗闇の中での祝宴となった。父が泉地区の区長をしていたので、そのころ我が家

が京都の壬生伯爵家の疎開先となっていた。壬生伯爵家は、皇室と近縁なので、家の周辺には毎日警察が立っていた。菊の御紋章のついた祝袋に、三円が入ったお祝いを頂いたことを覚えてゐる。再度渡支するとき持って行き、引揚げの際に小物類と一緒に焼却した。今持っていれば記録として証になるものと心惜しい思いである。

六 今も忘れ得ない終戦

唐山站(駅)では毎朝九時に点呼があった。日本人助役で鹿児島県人の淵脇篤氏が通訳をしてくれて、その日の仕事を伝達した。八月十五日には、今日正午に重大放送があることを告げられた。中国人駅員の行動が騒がしくなっていて、何だろうと訝しく思っていたが、私には全く分からなかった。暑いかんかん照りの下で、アカシアの樹に止まっている熊蟬が一斉に鳴いていたことを覚えている。古いラジオの前で全員が集まって、十二時を待った。「ガーガー」と雑音で聞き取れなかったが、駅長、主任、助役の話から、「日本は戦争に負けてポツダム宣言を受諾した」ということを知った。日本人は皆泣いた。目は真っ赤になり、語る言葉も出ず、虚脱状態に陥ってしまった。仕事を早々

片付けて、それぞれ社員寮に帰った。忘れられないあのときの感傷、それは同志の社員と共に筆舌に尽くし難い淋しさが込み上げた。乾燥した照りつけた八月十五日、アメリカの飛行機が低空を何回も飛来した。唐山市には、日本領事館と日本軍部隊の司令部があったからだと思う。

今まで従順であった中国人駅員の態度は一変した。「中国は戦いに勝ったんだ」という誇りに湧いたのだろう。勝者と敗者の区別はもう上下の職階を超えていた。私は住居としていたハ絃寮で妻と向き合っていたが、話は暗かった。妻との会話は、これからのことばかりであった。妻は日増しに身は重くなり、ハカ月の体になっていた。寮にはいつ暴徒が来るか分からない状況で、木刀の先に包丁を紐で巻き付けて、方が一のときの武器として備えておいた。上司の命令により、私の主たる仕事である給料の支払い事務を急いで行った。日本人、中国人の給料の支払いを無事に片付けて、唐山站を離れたのが九月ごろであった。幸いに、私が日本語を教えていた中国人生徒が大勢来て、「渡邊行久(トウベン)先生！」と言って抱き合い、別れを惜しん

だ。熱い胸のぬくもりが今も思い出される。彼らも生きていたら七十〜八十歳になっているはずだが、どうしているかなあと偲ぶことがある。

七 天津引揚者收容所に收容される

(一) 收容所で妻の出産(昭和二十年十二月八日)

唐山站から天津に向かい、三日ぐらい経って昭和二十一年九月二十五日に、天津引揚者收容所に入った。天津收容所は、終戦までは北支那派遣軍の糧秣處だった建物で、戦闘機の入るぐらいの大きさの倉庫が二百棟ぐらいあった。すぐ先は広い原野で、沈む夕日の美しさに見とれたものだった。その中の一つの倉庫の土間に「米かます」を開いた筵一枚が私たち二人の居場所であった。倉庫内には三百五十人から四百人ぐらいの避難民が入り、雑魚寢であった。隣の人の体が私に触れるぐらいに詰め込まれていた。天津收容所に收容されるまでは、貨車床の鉄板の上で寝起きしていたが、汽車はなかなか走らず機関士にお金をやっけて走ってもらった。

收容所生活の昭和二十年十二月八日朝四時ごろに、妻の陣痛が始まり、布団をまとめてニキロメートルぐらい

離れた産部屋へ歩いて行った。遥かに見える小さな電灯を目当てに粉雪の降る道を妻の手をとって歩くこと二〇分ぐらい、妻の痛みはどんどん増してさぞ苦しかったことだろうと思う。妻の言うままに産部屋を探した。石炭酸の臭いのする部屋を見つけた。「産婆さん、お産婆さん」と呼び「頼みます、お願いします」と懇願した。産婆さんは福岡のみち子さんといった。産婆さんが「今寝たところですよ」と言いながら起きて来て、取り上げてくれた。「臍の緒」を切ってくれただけで、後のすべての始末は私がやった。ほかにだれもやってくれる人がいないので、どの夫もやらなければならなかった。子供の臍の治療の薬は黄色いデルマトールといった。

産部屋は土間に筵を敷き、その上に布団一枚。これは惨めなものであった。外には粉雪が舞っていた。

生まれた男の子は元気で、後から後から出産者が来るので二週間の約束が十日で出され、以前の倉庫の雑魚寢の場に戻った。收容所が寒いので妻は風をひき、高熱が出て三十九度ぐらいあった。軍医の荒っぽい診察では、肺炎だと言われた。そのとき軍医の使った薬は、肺炎に効く

「トリアノン」「カルシューム」「ビタミンB1」の三種類で、パッケージを捨てないで取っておき、収容所出所許可をもらい外出しては天津の日本租界で買って来て、それを私は注射器で妻に打った。

(二)「妻は風邪、肺炎、子供の乳もらい」

皮下注射はできたが、血管注射は経験も無いので難しかった。妻は「痛い、痛い」と言い、私は「我慢しろ、我慢しろ」と言つて、何回も血管に刺した。今考えてみると、よくもあんな危ないことができたものだ、今さらながらゾツとするときがある。消毒は煮沸するだけであった。心気の頂点に達した行動であつたのだから。妻は高熱で汗をかき、頭には風が**しらみ**いっばい湧いた。医務室から殺虫剤をもらつてきて、それを殺した。約三週間それを毎日打ち続けたので、妻は熱も下がりがり話をするようになり落ち着いてきた。命を取り留めたのであつた。毎日毎日だれそれと死んでいく収容所の様子は、語るに語れない廃れた感情に覆われた。

もう一つの労苦は、子供の乳もらいだつた。収容所生活

における私の難題中の難題だつたのは、まだ一カ月足らずの子供の世話です。妻が食事もできないので、当然乳が出ない。子供は腹がすき、泣き止まない。昼となく夜となく、三百五十人の収容者の中の乳母を捜し求めて歩いた。乳を頂いたときは、手を合わせた。子供の泣き声がだんだんと弱くなり小さくなっていくことに、妻の病身のことと共に身を切られるようなつらさを背にした。それでも生きる心は失せなかつた。

その収容所の中では、使役という仕事もあつた。炊事当番、掃除、水汲み。死んだ人の埋葬など、様々な仕事だつた。子供の死んだときは、バナナの籠に入れて埋葬した。その人たちの埋骨は、今どうなっているか気にかかる一事である。

子供の乳もらいで得た経験では、子供の成長と乳の濃度が違うことだつた。それを四週間の乳、三週間の乳、あるいは一カ月の乳と様々なもらい乳をしたので、腸疾患を起こし青いウンチが出るようになり、体力も衰えてきた。男親として初めて味わたつた、母の仕事でした。夜二時、三時ごろ、子供が泣き止まないのです、ある奥さんをお願いし

たら「今うちの子供に飲ませたばかりで乳が張っていません」と断られたときは、私も泣きたい気持ちであった。

妻は病身のため動くことができず、零下何度の外のトイレに妻を背負って用を足していた。このような収容所の生活が六十日以上も続いた。だが、それにうち勝って帰国した私たちです。

八 引揚船乗船、そして子供死亡

昭和二十一年三月下旬、ようやくにして引揚船の手配が付いたらしく、引揚げが開始された。引揚者は胸に名札をつけた。小さな荷物にも名札を付けた。明朝四時半集合のため、準備が完了し引揚船に乗るばかりになった。みんなは、待ちに待った帰国の知らせに嬉しさが湧いていた。だが、その夜に思いもよらないことが起きた。渡辺某という戦犯者を捜すために、渡辺という名の男性は全部残されることとなった。私はこの機会を逃さず、妻、子供だけでも早く帰そうと思ひ、病身の妻に子供を背負わせ、一人で出発させた。頭から防空頭巾をかぶり、「気を付けて行けよ」と手を握って別れた。そのときの妻の手は冷たかった。お互いに泣いて別れた。

引揚船の中では、妻は子供に乳をやれずミルクもなく、どうとう船の中で子供が死んでしまった。博多に上陸後に火葬にして、妻は骨を抱いて一人で帰宅した。その姿は蠟人形のようなだったと人に言われた。病身の妻が、一人で行った処置はさぞつらかっただろう、よく生きられたと神に感謝した。

「三つ月子を妻背負いて引揚船 出ぬ乳くわえ 母の胸で死す」

九 引揚船C一三四部隊指揮班長として一カ月

遅れで帰国

渡辺姓の男性は国民党軍と米国軍のMPPによって調べられた。渡辺某は戦犯者であったが逃亡したので、捜索されていた。調べられた日は一カ月余り続いた。

私は今まで家族と一緒にだったが、男一人になったので集団の役員にさせられ、引揚者C一三四部隊の指揮班長となった。引揚乗船者約六百人を六班に分け、各班長を決めて行動を共にした。腕にはC一三四部隊、胸には指揮班長の胸章を付けた。船はLSTといって米軍の上陸

用舟艇で、鉄の船底に毛布一枚で寝た。大連沖を通過するとき、ソ連海軍の艦船に拿捕されて大連港に引き戻されて、三日停泊した。理由は何であったのか、今もって分からない。

佐世保の南風崎に着いたのが、出航して六日目、船の中では死者も出て水葬のときにはみんな合掌した。船は死者を弔うためにその地点を三回廻り汽笛を鳴らしたが、悲しく涙の止まらないひとときであった。上陸と共に、C1一三四部隊は解散した。

十 昭和二十四年から現在に至る引揚者活動

昭和二十一年四月末引き揚げて来て間もなく、熱海市内の引揚者の集会に入り、在外財産補償の運動を始めた。その構成は、満州からの引揚げの人たちが多かった。それは、「国策に従って海外に移住し、苦勞して築き上げた財産が中国に対しての賠償にあてられたので、その代償を政府は引揚者に払うべきである」というのが理由である。国会議員百三十人も同調して、全国大会を何回も開いた。当時、活動は活発で、引揚者各人は希望と夢を持っていった。

その結果として、政府は有識者を交えてシベリア抑留、恩給欠格者と引揚者の要望を処理するため、法律六十六号で四百億円にのぼる資金を基盤とする平和祈念事業特別基金を設け、三団体の要望に対しての問題処理にあたった。平成三（一九九一）年六月のことだった。私はその後、平和祈念事業特別基金の運営委員に委嘱されて、現在もその任務を果たしている。

省みて引揚者の救済に関連する仕事にかかわったのは、数えれば五十八年にもなり、それだけ引揚時の労苦が体に滲みついている。

十一 地方自治への努力 熱海市議会議員七期、

静岡県議会議員一期

私の住所、静岡県熱海市は、静岡県、神奈川県の境界にあり、静岡県の東の端、人口二千五百人ほどで、政治的にも疎遠の町だった。私は海外での経験、そして引揚げの苦勞、帰国してからの体験、疲弊した地方自治などに対して憂国の至情に燃え、四十一歳の若さの血潮みなぎるところで、熱海市議会議員に立候補した。だから私も「落ちるからやめろよ」と言われたが、決めた限りはやる

と云つて突進した。議員定員三十人、立候補者四十三人の中で初戦で六番で当選以後、七期連続当選することができた。もとより、住民各位の地域開発を願う情熱に推されたもので、感謝以外何ものでもない。その後、静岡県議会に一期を務めて、生の政治から身を引いた。三十二年間に及ぶ議員活動だった。

自由民主党の再編があり、自民党熱海市支部長に推され、平成二十年三月まで十七年間勤め、熱海市政と県連合会、政府に対して地域振興のため活動し、ささやかでも向上に務めた。

伊豆の人たちと県連合会、大勢の人々の交わり、主義主張の一致、地域を愛する連帯感など今日の私の生活の中で目に見えない心、貴重な財産として有り難く感謝している。

この三十二年間の政治活動の中で、住民決議という極めて重大な問題が起こった。それは昭和二十八年町村合併促進法第二五六条で謂る昭和の合併であった。全国一万の市町村を三千にするという国の方針で、その中で我が町、泉がその是非を問われることになった。住民間に賛

否両論の感情問題が起こった。八年余りの感情紛争の末、全国で唯一内閣総理大臣の裁定で、従来通りで収まった。私はその暗かった住民活動を記録に残したいと考え、四年掛けて「県際泉聲録」という名題で上梓した。

十二 引揚者団体活動の締めくくり

独立行政法人平和祈念事業特別基金が時限立法となり、二十二年九月をもって廃止される。法律第六十六条の基金法が設立されてから、私たち引揚者団体は衛藤征士郎理事長の元に、

一、引揚者に内閣総理大臣の書状交付

二、書状交付に盃を付けてほしい

三、全国の引揚者の労苦を伝える労苦資料館と祈

念碑を国家で建立してほしい

の要望を強く求めてきた。衛藤理事長の政治的手腕により、前述の三点が概ね果たされて、終結することになった。祈念碑は「平和の礎」から「平和の鎖」に呼称したいと思う。世界に平和の輪を広げたいと考えているからである。かつてイタリアトリノのオリンピック開会式で、日本の小野洋子は「世界十億の人が平和を叫べば平和は達成できる」と

壇上で叫んだ。平和祈念の礎から鎖にしたい心はそこにある。

四百万人余りの引揚者が今何人生き残っているでしょうか。四十七都道府県に例えば二十人いたとしても、百万人足らずでいつかは運命の川を渡ることになる。私もその一人であることに寂しさがこみあげてくる。六十余年に及ぶ引揚者としての、いささかの努力をする中において、大勢の引揚者の皆さんにお世話になった。在りし日の人、逝きし人の顔、心から感謝と御礼を申し上げて、この稿を締めくくらせて頂きます。また、平和祈念事業特別基金に関わった方々、長い間ご指導を頂き有り難うございました。さようなら。

あとがき

現在の心境について、六十三年夫婦生活を共にした妻が、平成二十年四月七日十二時に死去した。そして私はその年の十二月八日に、悲しみ切々たる思いで短歌をしたためた。希しくも、その日は引揚船上で亡くなった長男が収容所で生まれた日であった。生きていれば六十三歳の男である。妻は二十歳で私と結婚、中国唐山市で終

戦を迎えて引揚げ、帰国後旅館商売で一生を終えた。私の政治的活動三十二年。生活を共にしてきた。苦勞を掛けた。

妻！

知らない二人が 結ばれて

人間生活に入る 社会の交りの中で

妻は成長し 三女の母となる

血を分けし者より 誰よりも

どんなことでも 話せた それは

妻であり 妻以外になかった

農林省を止め 二十歳で満州に渡る

六十三年頼られ 頼まれもした

時には 強いことを言った 自分

内には弱い感情が 心をつくろい

恥じらいを 感じもした あの日

夫の社会的立場の 向上に

身を小さくして 支えてくれた

誰よりも 夫のことを思ってくれた

熱の出たとき 腰痛のときに

心配してくれた妻だった

桜が散った 海の見える部屋

時 二十年四月七日十二時

その妻 もう戻らない道に向かう

有り難う妻よ さようならセイ子

一路安穩を祈る

結ばれて 六十歳の星を仰ぎ見て

慈し照らす 静や 逝くいとし

